

文・写真 松澤美穂

地方 紀行 民鉄

アルピコ交通株式会社 上高地線



北アルプスを背景に、
田んぼの中を走り抜ける。
学生たちの賑やかな声に
あふれた電車は、季節が来れば
上高地へ向かう観光客も運び出す。

季節

節は少し過ぎて昨年10月。閉山間近の上高地の紅葉散策を楽しみに、滑り込みで訪れたのは、アルピコ交通上高地線。出発点は松本駅。上高地へ向かうには、ひとまず終点・新島々まで乗車し、バスに乗り継ぐことになる。さっそく「アルピコカラー」と呼ばれる白い車体に5色のラインがペイントされた鮮やかな電車に乗り込んだ。

乗客の4割は観光客

出発を待つ車内には、大学生らしい女性たちの声があふれる。よくよく車内を見渡せば、上高地に行くと思われるハイキングスタイルの乗客も多く、乗客の4割強は観光客が占めていた。しかし、平日の観光客には比較的年配の方が多く、女子大生の華やかさにはかなわない。

電車は賑やかに発車。ところが、動き始めて約10分。電車が北新・松本大学前駅に着くと、学生たちは一斉に下車。とたんに車内はガタンゴトンとのどかな音が響く空間に。

静かな乗客たちが、思い思いに車窓に広がる刈り取りを終えた田んぼやりんご畑を眺めるうちに、バスターミナルが併設された新島々の駅に到着。電車と同じアルピコカラーのバスに乗り継ぐ。

走り出したバスは、すぐに山の中へ。車内に流れる、上高地や梓川に造られたダムに関する解説を聞きながら、揺られること約1時間。思わずウトウトしかけたところに、バスは上高地の名所の一つ、大正池に到着した。

今の上高地は、「今」しか見られない

ガイドブックによれば、初心者には大正池から河童橋までの1時間程度のコースがおススメ、とのこと。「山ガール」になったつもりで、大正池から歩き出す。

焼岳の噴火で梓川がせき止められて出来た大正池は、その中に白く立ち枯れた木が残る景色で有名。しかし、大正池には日々、上流から土砂が流入するため、池は次第に小さく浅くなっていく。池の景観を守るため毎年、閉山後にはたまった土砂を取り除く作業が行われるが、枯れ木が朽ちていくのを防ぐことはできず、池に残る立ち枯れの木はだんだん少なくなっているらしい。

秋晴れの空の下、北アルプスの山並みに囲まれた大正池は、明るく清々しいけれど、数年後、数十年後には消えてしまってもかもしれない景色だと思つと、幻想的にも見えてくる。

紅葉シーズンの大正池はまずまずの人数。河童橋へ向かう道筋にも人影は絶えないが、取り囲む木々が目隠しになって、時折フツと一人きりになる瞬間もある。赤というより黄色に染まる上高地の紅葉は、落ち着きのある美しさ。高層ビルと通勤ラッシュの日常生活とは、遠くかけ離れた光景に、思わずぼんやり立ち尽くす。

景色に見とれつつ、写真を撮りつつ、あつという間に1時間。河童橋が見えてきた。バスターミナルに程近い河童橋周辺は、ホテルやお土産物屋が立ち並び、「観光地」らしい楽しげな雰囲気だ。

上高地線 【かみこうちせん】

日本アルプスの麓、松本市西部を走る14.4kmの路線。駅数は14。松本駅と、山岳路線バスが発着するターミナル駅、新島々駅を約30分で結ぶ。2011年4月、諏訪バス・川中島バスと合併し、松本電気鉄道からアルピコ交通株式会社に。



新島々駅はバスターミナルも兼ねている





立ち枯れの木は、年々減少



秋の大正池は水かさが少ない

ここからまた1時間ほど歩けば、もう一つの名所、明神池を見に行くこともできるが、初心者には無理は禁物。クラシカルなリゾートホテルで一息ついて、帰りのバスへ。

夕暮れ時は、通学電車

バスで戻った新島々駅から、再び電車へ。ハイキング疲れの観光客を乗せた電車はやっぱり静か。しかし時刻は夕方、学生たちの帰宅時間だ。

上高地という一大観光名所へアクセスする上高地線は、「観光路線」のイメージが強いが、実は乗客の65%が定期券利用者だという。なるほど、滑り込んだ波田駅のホームには、たくさん小学生。元気の固まりのような彼らが飛び込んでくると、車内は一気に満員御礼。次の駅では中高生らしい集団も乗り込んできて、車内はおもちゃ箱のような賑わいに。

小学生、中学生とくれば、やっぱり次は大学生だ。次々と乗り込んでくる学生たちと入れ替わるように途中下車する。

電車の姿が待ち遠しい

賑やかな電車を後に降り立ったのは、学生たちの姿が消えて、静まり返った北新・松本大学前駅。駅周辺の住宅街を抜ければ、線路沿いには刈り取りを終えた田んぼが広がる。

田んぼのあぜ道をたどりながら、電車が通るのを待っていると、どうやら同じ目的らし

い小さな男の子が母親の手を引っ張って来る。挨拶を交わす間にも刻々と日は傾く。次の電車が来る前に日が落ちてしまっんじやないかと心配になったころ、ようやく踏み切りの音が響き、電車がやって来た。

手前には広々とした田んぼ、遠く後ろには北アルプスの山並み。暮れた景色に白い車体は半ば溶け込む。もう少し夕日が赤ければ、完璧な「日本の秋の夕暮れ」なのに。贅沢なことを考えながら、上り下りの電車を見送り我に返ると、いつの間にか親子連れの姿は消えて、周囲はすでに薄闇。とたんに落ち着かなくなってきた、急いで次の下新駅へ。

ログハウス風の下新駅の駅舎にはもちろん明かりが灯っているが、初めて訪れる土地の夜の無人駅。ポツンと1人、電車を待つのは少し不安で寂しくなる。時計と時刻表を見比べること数回。ヘッドライトを光らせて、ようやく電車が姿を見せた。

明るい車内で思い返せば、今日1日は夢のよう。夢の余韻に浸りつつ、散策は無事終了。

花が咲いたら目覚めの季節

紅葉の雑木林を歩き、北アルプスの山々を背景に夕闇に沈む電車を眺め、夜の駅で電車を待った日から、あつという間に数カ月。11月半ばに冬籠りについた上高地も、花の季節が到来すれば、そろそろ目覚めのお時間だ。

新緑の春に涼やかな夏、そしてまた黄金色の秋。新しい年の新しい景色が上高地を彩り始める。



夕暮れ時、北アルプスを背景に走る



ヘッドライトが辺りを照らす



上高地の紅葉は黄色